説教20211031ヘブライ7：22-28マルコ12：28-34「最も重要な掟」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

愛と言うのは掟であり、喜びであり、また苦しみであり、忍耐であり、与える者であり、また受ける者でもある。このように列挙しただけで、愛とは何かと言う問いが、私たち人間には容易に答えることが出来ない一筋縄ではいかないことであることが思い知らされます。愛と言うのは、殊に聖書においては、まったく人間が計画出来たり、したりするものではないことが思われます。この世で多く見られます、人間たちが計画した愛は、無難に実現したように見えても、それが陳腐化して、力を失っていくということもまた引き続き起こってくるようです。

愛は実践であり、愛の形は様々です。愛は人間には定義不可能であり、究極的な救いともなる一方で、苦しみに至ることもあるでしょう。また愛の形は時間の経過とともに変わってきますし、救いと苦しみとが立ち替わり訪れることもあるでしょう。

私たちは愛の形を、両親などから見習い、それをまねていくことで、自分自身の愛を形作っていくようです。自分自身のことでありながら、形作っていくのだと、断言できないのが歯がゆいですが、人間にとって不思議であって驚きである愛については、私たちは自分たちで決めるのではなく、神様によって決められることなのでしょう。

幸いなことに今日、イエス様は私たちに究極的な愛の定義を語られます。愛の定義は神様が語られることで、信ぴょう性を伴い意味を持ちます。その御言葉は私の口を通して伝えられはしますが、決して私、尾崎二郎の言葉としては受け取らないでください。

言わずもがなのことを言ってしまいましたが、では、イエス様の御言葉に聴いて参りましょう。

『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』

イエス様はこのように私たちに言われました。なんという簡潔で美しくやさしい御言葉なのでしょうか。イエス様は旧約聖書に記されている沢山の律法を、このようにたった１行にまとめられました。このまとめるという作業も、神であるイエス様ご自身でなければ成し遂げられませんでした。なぜなら神の愛を実践した初めての人がイエス様だったからです。そして、その１行にまとめた愛の定義を、イエス様は様々な人々の口を通して、世に広めようとされておられるようです。今日のマルコ福音書１２章33節では、律法学者の口がこの愛の定義を語っていますし、まさに今、私もそれを語っています。そしてこれくらい簡単な文章ならば、幼い子供達でも、丸暗記して口ずさむことは難しいことではないでしょう。言葉と言うのは不思議なもので、最初は訳も分からず唱えていたことが、いつのまにか意味を持つようになり、実体を伴い、実現をしていくということがあります。私たちは、機会あるごとに、このイエス様の簡潔な愛の御言葉を隣人に語り伝えていきたいと願います。

さて旧約聖書に記されている沢山の律法と言うのは、主に出エジプト記やレビ記や申命記などに記されています。出エジプト記には「あなたには、私をおいて他に神があってはならない」から始まる十戒が記されています。またレビ記には十戒などの基本的な律法から派生した、日常生活における多種多様な戒めが記されています。そこに記される戒めは具体的で実践的なことです。例えばレビ記１９章６節には次のように書かれています。「献げ物の肉は、ささげた当日とその翌日に食べねばならない。三日目まで残ったものは焼き捨てよ。」こんな風に神様が取り決めて下さるのなら人間はある意味、楽ですね。なぜなら三日たった肉を捨てるべきかどうかを自分たちで決める必要がなくなるからです。

イエス様は、このように基本から実践に至るまで事細かに取り決められた律法の中からたった２行を選び出されました。まず第一番目の掟は、『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』です。これは、申命記６章４節に出てきます。そして第二の掟は『隣人を自分のように愛しなさい。』です。これはレビ記19章１８節に出てきます。私たちはこの二つの戒めがもともと別々に、そしてけっこう離れた場所に記されていることに注目したいと思います。この二つの戒めはもともと別の文脈で記されたことです。第一番目の掟は、神様から愛されていることを忘れている私たち人間が、その愛に立ち返り神を愛するものとなるようにと、この掟を額に記しして、日々戒められるというものです。私たちはこの戒めによって、神の愛を、自らの心に定義づけされるのです。

そして、第二番目の掟は私たち人間にとって、より実践的な教えです。私たちは神様の愛を完全には知っていないながらも、この隣人愛の掟の方は実践していくことが出来るでしょう。また、現実問題として、神様の愛を完全に知るのが最後のキリストの時になるのだとしたら、私たちは、さまざまな愛の苦悶に遭遇しつつも、この隣人愛の方を実践しながら歩んでいくように、神様から言われているのではないでしょうか。

いずれにしましても、イエス様が、この二つの別々の掟を、実に簡潔に１つの文章にまとめられたのは、大変重い意味を持っていることでしょう。イエス様は、今の人間が実現しえないような高みにある神の愛を、今、人間がもがき苦しんでいる人間の愛の現実と連結していくことが出来るということ、、それらの愛が、もともとは一つであったことを私たちに教えて下さっています。

さて人間の愛の実践ということは、神の愛を見上げていくことによって、高められて来ました。ちょうどヨブ記を読み終えましたので、ヨブのことをお話しますと、ヨブは初め多くの財産を持つ裕福な人として現れ、それから、神によって試練を与えられ、身ぐるみはがされて、その試練の苦しみの中で、神に出会って、最後にまた、財産を回復されて裕福な人となりました。そんなヨブの姿を、愛の実践という観点からみていきますと、初め裕福だったときに、ヨブが人をどのように愛したのかは、次の箇所で露わになっているでしょう。ヨブ記1章 05節をお読みします。　　「この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。」

私たちはこのヨブについて黙想する時、いささか神の愛から外れた、人間的な愛の匂いを感ずるのではないでしょうか。それに比べて、再び裕福にされたヨブは、隣人愛において見違えるほどの実践を行うものへと変えられました。ヨブ記 42章 10節からをお読みします。「ヨブが友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元の境遇に戻し、更に財産を二倍にされた。兄弟姉妹、かつての知人たちがこぞって彼のもとを訪れ、食事を共にし、主が下されたすべての災いについていたわり慰め、それぞれ銀一ケシタと金の環一つを贈った。」ヨブは、隣人の為に神にいけにえを捧げる者から、隣人の為に、神に執り成し祈る者へと変えられたのです。

さて、いけにえというもの、が愛について黙想する時、よく出てまいります。マルコ福音書33節では、律法学者は「どんな焼き尽くす捧げものやいけにえよりも優れています」と語っています。しかし、今の私たちには、このいけにえというものが一体、何なのかを実際には思い描くことが難しいのです。「献げ物の肉は、ささげた当日とその翌日に食べねばならない。三日目まで残ったものは焼き捨てよ。」などと言う律法をきかされても、実のところピンと来ませんし、ちんぷんかんぷんなのです。そのことは、今の私たちが、今の教会でいけにえを捧げることがないので当然なのですが、旧約の民たちがこんなに具体的に、実体をもって日々捧げていたいけにえについて、考えてみることは、私たちが愛について思いを深めることの助けになるかもしれません。

いけにえを日々神様に捧げることは、旧約の民にとって、神との交わりを保ち、自分たちの罪を赦してもらうための、実践の業でした。言い換えれば、旧約の民は、神の愛を繋ぎとめるために、神にいけにえを捧げ続けたのでした。それは一種の罪滅ぼし的な愛の業と言えるでしょうが、このような現物を伴い、実際に見ることが出来る愛の実践は、旧約の民に限らず、今の私たちも実は求めてしまうことでしょう。愛は具体的な物事と関わって、進んでいかないと、なんだか雲をつかむような実体がない、味気がないことのように思われてしまうからです。

ではイエス様によって新しい愛の掟を与えられた私たちにとっての愛の具体的な物事とは一体何なのでしょうか。律法学者をして「『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」と言わしめた、その愛のリアリティーとは一体何なのでしょうか。

私たちは隣人愛を実践していく中で、当てが外れ、傷つけられ、傷を負って前に進めなることも数多く起こります。そんな時、私たちは、今なお、いけにえを捧げることによって、その痛みを和らげようとするのではないでしょうか。しかし、そんないけにえよりも優れている御言葉、すなわちイエス様ご自身が、その傷つく今の私には与えられているのです。御言葉はどんないけにえよりも優れていて、私に誠の癒しと救いをもたらすものです。私たちはそのことを最後まで信じ続けてまいりましょう。そして、今の私たちに与えられている愛のリアリティーとは、隣人愛において傷つき打ち砕かれることであります。私たちは愛によって打ち砕かれても絶望に終わるのでも、命を取られるのでもありません。むしろその逆です。私たちは自分自身が打ち砕かれることによって、古い自分が変えられ、新たな愛の実践をするものとされ、ますます神を愛することを知るようになるでしょう。今日の御言葉の通り人間の愛と神の愛とが一つにされていくのです。

では、その私たちが打ち砕かれ痛みを負いながら、そこに救いを保証してくださるのは何者か。それはイエス様御自身です。イエス様は自らの身をもって十字架で打ち砕かれ苦しまれました。自らはいけにえとして捧げられましたが、そこにこそ神の愛が降り注いだのでした。彼は死に支配され続けることはありえず、神の愛によって復活させられました。　そして今やイエス様の全てに勝る苦しみが、私たちの隣人愛の実践を支えていてくださいます。どうか、私たちがイエス様の御言葉をかみしめつつ、愛の実践に励んでいかれますよう、神の導きを祈ります。

祈ります

憐み深い父なる

あなたは、私たちに御子をお与えになり　『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛しなさい』という御言葉を聞かせて下さいます。どうか私たちがこの愛の掟の御言葉を実践し、またそれを子供たちに繰り返し教える者とならしめてください。

世界に広がる教会が一つの聖霊で満たされ、あなたの愛が果てしなく降り注ぐ教会にあって、私たちが愛し合うことが出来るようにしてください。ことに世界各国に住む私たちの兄弟姉妹との親しき交わりを楽しむことが出来ますよう、私たちをあなたの御子の体としてください。

また、一足先に世をさった兄弟姉妹を覚えます。どうか地にある私たちを愛して下さるあなたが、その同じ愛をもって彼ら彼女らを、最後のキリストの日まで守って下さいますように。キリストの日に再会する私たちが、あなたの永遠の愛を豊かに受けることが出来ますよう、今の時に、隣人愛を行っていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に